

広中一成著

後期日中戦争

——太平洋戦争下の中国戦線

KADOKAWA／2021年4月／280頁／920円＋税



本書の概要

本書は、日中戦争に関する多数の業績を有する著者が、「後期日中戦争」における軍事的な展開を新書という形式で叙述したものである。周知のように、日中戦争の研究にはすでに膨大な蓄積があり、日中戦争をテーマにした新書も数多く存在する。しかし、本書には類書と大きく異なる二つの特徴がある。

第一の特徴が、タイトルにもなっている「後期日中戦争」という枠組みの設定である。「後期日中戦争」とは、「太平洋戦争開戦後の日中戦争」を指している。著者によれば、アジア太平洋戦争を扱った多くの書籍が、太平洋戦争開戦後の日中戦争を十分に論じられていないという。「後期日中戦争」に関する知識を日本人がほとんど有していないのは確かであり、日本人の歴史認識を問う手法として、本書はクリエイティブな枠組みを提供している。

そして第二の特徴が、名古屋第三師団に着目するという手法である。名古屋第

三師団は日中戦争勃発後すぐに中国戦線に投入され、終戦まで一貫して中国で戦い続けた部隊である。第三師団が「後期日中戦争」における全ての戦闘に参加したわけではないが、著者は第三師団を「縦糸」としてたどることで「中国戦線の全容」を知れると考えた。第三師団が参加した戦闘を中心に論じることになるので、東条英機、蒋介石、毛沢東といった日中の指導者は主たる分析の対象となっていない。つまり本書は、第三師団の参加した戦闘をミクロな視点で描く「狭義の軍事史」ということになる。

以上の二つの特徴を有する本書は、「後期日中戦争」において第三師団が参加した戦闘を扱っている。具体的には、「第二次長沙作戦」「浙贛作戦」「江南殲滅作戦」「常德殲滅作戦」「二号作戦（大陸打通作戦）」である。これら五つの戦闘を分析したうえで、「おわりに」で「なぜ日中戦争はこのような長く泥沼の戦いとなったのか」という問いに答えていくことになる。

第一章「最初の敗北——第二次長沙作

戦」では、太平洋戦争開戦直後に始まった第二次長沙作戦を扱っている。この作戦は、香港へと向かう中国軍を牽制するための陽動作戦として計画された。そのため、当初は長沙までの進攻は企図されておらず、汨水方面の攻撃をもって作戦を完了とするはずであった。一方、中国側でも第一一軍の進攻に備え、第九戦区司令長官の薛岳が「天炉戦法」（事前に配置した守備部隊による待ち伏せ攻撃、誘導攻撃で敵戦力を消耗させた後に、優勢な兵力で決戦を挑む）を立案した。実際には香港作戦が終了したために、第三

師団が作戦を開始した段階で陽動作戦としての意味は失われたが、汨水を渡ったところで第一一軍司令官の阿南惟幾は、参謀らの慎重な意見を押し切って、長沙への進攻を決断する。しかし、長沙へと向かった日本軍は中国側からの猛攻を受け、長沙への入城を断念せざるを得なかった。結局、阿南は長沙からの「反転」を決めるが、第三師団は長沙から退くなかで中国軍からの追撃を受け、多くの死傷者を出すに至った。第二次長沙作

戦は日本軍の大敗に終わったが、阿南をはじめとしてこの「負け戦」の責任をとる者は現れなかった。

第二章「細菌戦の戦場——浙贛作戦」

では、一九四二年五月から九月にかけて浙江省と江西省で行われた浙贛作戦を扱っている。四月一日日に米軍による初めての日本本土空襲が行われると、大本营は米軍機が利用していた浙江省の飛行場を破壊し、日本本土への空襲を阻止するための作戦を命じた。中国軍との戦闘のなかで第三師団は、ウジ虫、赤痢、酷暑に苦しむことになったほか、コレラの被害も受けていた。これは浙贛作戦のなかで日本軍が撤いた細菌によるものであった。第一三軍は衢州を攻略し、周辺の飛行場や交通機関を破壊した後、撤退する地域に細菌をばら撒いた。これにより衢州一帯で伝染病が蔓延する。浙贛作戦の細菌戦は「日本軍の組織的な犯罪行為として、今後も銘記されるべきである」と著者はまとめている。

第三章「暴虐の戦場——江南殲滅作戦と廠害事件」では、一九四三年五月から

六月にかけて湖南省北部で行われた江南殲滅作戦と、この作戦の過程で起きた虐殺事件である廠害事件を扱っている。江南殲滅作戦は、四川省の重慶、成都までの進攻を狙う五号作戦が中止になったことを受けて計画されたものであり、江南地域の中国軍を撃滅することを目指していた。日本軍は中国軍との激戦の末に南県を占領したが、このとき住民三万人が虐殺されたという廠害事件が起きた。ここで著者は、廠害事件の生存者の証言を複数引用し、日本軍による住民の殺害の様子を叙述している。また、廠害惨案遇难同胞記念館のまとめを取り上げ、日本軍による凄惨な殺害方法、強姦と略奪の被害を紹介している。そのうえで著者は、生存者の証言と記念館のまとめとの間にある内容の不一致を指摘し、「廠害住民が日本兵から暴行を受けていたことは間違いないが、被害状況や殺害者数については、いまいちど検討を要する」とまとめた。

第四章「毒ガス戦の前線——常德殲滅作戦」では、一九四三年一月から一二

月にかけて湖南省中西部で行われた常德殲滅作戦を扱っている。常德は湖南省から重慶へと向かうルート上に位置しており、日中両軍にとって戦略的に重要な場所であった。実際の戦闘では、阿南惟幾の次男惟晟や歩兵第六聯隊の中畑護一聯隊長が戦死するなど、相当の損害を受けていた。しかも、中畑聯隊長が中国側戦闘機からの機関銃掃射を受けて戦死しているように、中国戦線の制空権は中国側に握られていた。この作戦で日本軍は毒ガスを使用しており、毒ガスが流れる位置にいた第三師団の兵士も苦しみにあえぐことになった。これを受けて著者は、「日本軍に毒ガス弾で直接攻撃された中国軍將兵、またとばかりを受けた現地住民の苦しみは、想像を超えるものであったろう」と述べている。常德城の攻略に際しても日本側は毒ガスを使用したのが、中国側の抵抗は凄まじく、第三師団も多くの犠牲を出した。

第五章「補給なき泥沼の戦い——一号作戦（大陸打通作戦）」では、一九四四年四月から支那派遣軍が中国中央部を南

北に縦断する一号作戦を扱っている。一九四三年一月、中国大陸から飛来した米軍機によって台湾の新竹飛行場が空爆されると、中国大陸を南北に貫く大陸縦貫鉄道打通作戦の検討が始められることになった。一九四四年五月に第三師団は湘桂作戦に参加するが、間もなく米軍機からの爆撃を受け、瀏陽攻略戦でも第九戦区部隊と壮絶な火器の打ち合いを繰り広げる。瀏陽に入城した後、第三師団は南へと進撃を開始するが、途中で後方からの補給が途絶え、食料は現地調達せざるを得なかった。さらに、炎天のもとでの行軍が続くと、アメーバ赤痢やマラリアなどの伝染病に襲われる兵も現れ、特に兵力不足のために動員された年長者の兵のなかには、戦場にたどり着く前に命を落とす者もあった。桂林と柳州の攻略を目指す第二期作戦では、第三師団の第三四聯隊が修仁を攻略する過程で中国軍からの猛攻を受け、多数の兵が戦死した。最終的には第三四聯隊が柳州飛行場の占領に成功し、第三師団も貴州省南部まで進むことができた。しかし、一号作

戦が終了しても、米軍機は中国のさらに奥地から日本への空襲を続け、中国軍が撤退のなかでレールを剥ぎ取ったために鉄道の確保もできず、本作戦でも劣勢な状況を打開できなかった。

「おわりに」では、第三師団が終戦してから復員するまでの過程を概観したうえで、本書の議論をまとめている。著者は「後期中戦争」の特徴として、「作戦の大半が、太平洋戦争の展開に大きく影響を受けながら立案、実施されている」点を指摘している。そして、著者は「後期中戦争は、なぜそれほど混乱したのか」という問いに対し、「日本が日中戦争に明確な目的を示せなかったこと」をその答えとして挙げている。日中戦争自体が目的もなく始まり、「東亜新秩序の建設」という大義名分も抽象的すぎて、日中戦争を解決する糸口にはならない。結局、太平洋戦争を始めてしまったために、日中戦争の解決は後回しにされてしまった。

本書の意義、疑問点

以上の要約を踏まえ、まず本書の意義を三点指摘したい。

第一に、本書で採用した「後期日中戦争」という枠組みの有効性である。本稿冒頭でも述べたように、多くの日本人が太平洋戦争開戦以後の中国戦線に関する知識を持たないなか、「後期日中戦争」という枠組み自体が日本人の歴史認識を批判的に問えるようになっていた。本書では「後期日中戦争」の軍事的展開を詳らかに検討した結果、日中のあいだで壮絶な戦闘が繰り広げられていたこと（第二次長沙作戦では敗北を喫していた）、日本軍が国際法に違反する細菌戦・毒ガス戦を展開していたこと、食料の補給が途絶えた日本軍が徴発と称した略奪行為を続けていたこと、などが明確になった。いずれの事実も「後期日中戦争」を特徴づける重要な要素であり、それらが新書という形式で一般の読者に伝えられる意義は大きい。

第二に、第三師団に焦点を当てるアプ

ローチをとったことで、戦闘の実態を生々しく描けた点である。これは、マクロな視点による日中戦争史では達成しづらい成果である。本書では、第三師団およびそれに関係する部隊の記録、兵士たちの回想を多数引用しており、兵士の視点から見た「後期日中戦争」を描くことに成功している。一つの戦闘に対し、さまざまな兵士の回想を引用することで、戦闘の実態を多面的に描けているのが、第三師団に着目した効果である。それに加え、中国側の証言を数多く引用していることも評価に値する。特に廠窖事件の生存者による証言は、ほとんどの読者が初めて目にするものであり、それを日本語に翻訳して紹介しただけでも大きな意義がある。読者は「後期日中戦争」で中国の人々が受けた被害をより鮮明に知ることができよう。

第三に、軍事史の議論を一般の読者でも理解できるようにする工夫が、随所になされている点である。章の冒頭のみならず、戦闘の経過を叙述する部分においても詳細な地図が掲載され、読者は各部

隊の位置関係を容易に把握できる。軍事的な作戦の展開などは一般の読者にとつて容易に理解できないもののはずだが、「天炉戦法」をはじめとして簡潔な解説が付せられていたことで、専門的な知識を持たない読者の読解を助けている。すでに複数の新書を執筆している著者ならではの配慮と言えよう。

次に、本書を通して評者が感じた疑問点を三つ挙げたい。なお、本書は新書という形式であるから、紙幅の関係で書けなかったこともあると想像される。そのため、これから列挙する疑問点のなかには、やむをえず本書の議論から外したものがあっても可能性もあり、その点をご理解いただきたい。

第一に、「後期日中戦争」を論じる意義を、もつと明確に示すべきだったのではないかという点である。もちろん、多くの日本人が知らない「後期日中戦争」の実態を伝えること自体に大きな意義はある。しかし、「後期日中戦争」の戦闘を詳細に追ったうえで、筆者が何を伝えようとしていたのかは、よくわからない

かった。「日本が日中戦争に明確な目的を示せなかった」ために日中戦争は混乱したという結論も、本書の特色あるアプローチとの関連が不明確である。「後期日中戦争」という枠組み自体にクリティカルな問題意識があったからこそ、それを論じる意義をはっきりと明示してほしかった。

思うに、多くの日本人は「後期日中戦争」を知らないのではなく、誤って認識しているのではないか。すなわち、「日本は中国には負けていない」という認識は戦後日本で広く見られているが、本書の議論で明らかになったのは、それが明確に誤りという事実である。この戦闘の実態と歴史認識とのギャップを明らかにし、日本人の歴史認識の歪みを突くことが、「後期日中戦争」を論じる意義の一つであったように思われる。

第二に、第三師団の戦闘に焦点を当てるアプローチをとったために、「後期日中戦争」の重要な側面をいくつか見逃しているのではないかという点である。ここでは特に、「後期日中戦争」が戦後の

東アジアおよび中国に与えた影響を指摘したい。本書の「おわりに」で、「後期日中戦争」が太平洋戦争の展開から影響を受けていたことを指摘しているが、これは日中戦争勃発以前からの蒋介石による抗日戦略の一つの成果という面がある。そして、蒋介石は「後期日中戦争」の最中にも英米と連絡を取り合い、戦後の東アジア秩序の再構築に主体的に参画しようとしていた。このような政治外交史的な議論が、本書のアプローチと相性が悪いのは理解できるが、「後期日中戦争」の重要な一側面であることは間違いない。また、本書でも認めていることだが、華北の戦いにいっさい触れていない点も惜しまれる。主として国民党を相手としていた華中・華南地域の戦闘とは異なり、華北地域では中国共産党の軍隊である八路軍や新四軍によるゲリラ戦が重要な役割を果たしていた。そして、ゲリラ戦を戦うなかで中国共産党は勢力の拡大に成功したが、一方の国民党は一号作戦で軍事的に大きな損害を被った。このことが戦後の国共内戦に与えた影響は看

過できない。華北の戦いに触れなかったことは、単に「後期日中戦争」の「北半分」に言及しなかっただけの問題ではなく、戦後中国との繋がりを議論することにも困難にしまった。

第三に、廠害事件の生存者の証言に対する解釈の仕方についてである。すでに述べたように、日本でほぼ知られていない廠害事件の生存者の証言を翻訳して紹介したことは、本書の大きな意義の一つである。ただ、生存者の証言を分析するなかで、実際の殺害現場に遭遇している者が少ないことの意味は、慎重に解釈しなければならぬ。端的に言えば、虐殺事件の殺害現場を目撃する証言が現れるのは難しい。虐殺現場に居合わせた時点で、その人物が「生存者」になる可能性は低い。仮に生き延びることができたとしても、殺害現場を観察する余裕のあった者は少ないだろう。評者自身が廠害事件の関連史料を見たことがないので、ここでこれ以上の議論はできないのだが、証言の解釈には慎重を期す必要がある。以上、本書の意義と疑問点を述べた。

繰り返しになるが、「後期日中戦争」という概念は、日本人の歴史認識を批判的に問ううえで有効な枠組みである。だからこそ、本書で「後期日中戦争」に対する歴史認識の問題に、より深く踏み込んだ議論をしてほしかったという感想も残る。いずれにせよ、類書とは異なる特徴を有する本書が世に出たことで、日中戦争をめぐる議論がさらに深められることを期待する。